ラフカディオ・ハーンの中国音楽への関心

——クレビールとの交流を通じて——

鄭　芝　婉

Lafcadio Hearn and Chinese Music

—As Seen Through the Interaction with H. E. Krehbiel—

CHENG Chihwei

This essay focuses on the studies about Chinese music of Lafcadio Hearn and his friend, H. E. Krehbiel, who was an American music critic and musicologist. Hearn and Krehbiel were colleagues in Cincinnati, reporter of the local newspaper. In the fall of 1877 they have met a Chinese musician Char-lee, and had a wonderful music experience in music club. Hearn wrote an article entitled "Romantic Episode at the Music Club" as souvenirs. Since then, for about 10 years, Hearn and Krehbiel kept discussing about Chinese music through letters.

In this essay, I outlined the contribution of Krehbiel in music, especially in Chinese music, that rarely mentioned in the previous research. Then, reviews Hearn's articles and letters about Chinese music by time order, so the interaction with Krehbiel could be explored. Also, solve some unsolved mysteries in the articles and letters, like what the "O-ME-TAW-BOODH" means. In the course of my argument, it should have become clear that it's Krehbiel whom lead Hearn to concern about Chinese music, thus began a series of studies about myths and worship of China.

Keywords: Lafcadio Hearn, Chinese music, Henry. E. Krehbiel, Music criticism.

キーワード：ラフカディオ・ハーン、中国音楽、ヘンリー・E・クレビール、音楽評論

一　はじめに

ラフカディオ・ハーンの生涯には、B. H.チェンバレンのような、深い親交を結び、頻繁に手紙を交わし、共通の話題について熱烈に討論する友人がわずか数人いた。クレビールはその一人であり、アメリカでジャーナリストとして勤めている時期のハーンと、書簡の往来が最も頻繁な相手である。

ヘンリー・E・クレビール（Henry. E. Krehbiel、1854–1923）とは、アメリカのジャーナリスト・音楽

評論家であり、1880年ニューヨークの新聞社『*The New York Tribune*（ニューヨーク・トリビューン）』に入ってから、アメリカ歌謡・音楽劇に関する鋭くかつ的確なコメントが世間に評価された。とくに、アメリカ黒人音楽・民謡に関する研究で知られていた[1]。ハーンの書簡集[2] には、1880年から1890年にかけてハーンがクレビールに送った数十通の手紙が残されている。そこには様々な文化により生み出す音楽のことが書かれており、いつでも二人が夢中で音楽について語っていたことがわかる。中国の音楽は、東洋音楽の代表として、常に論じられていることもわかる。中国の音楽に感銘を受けてから、ハーン自身の東洋嗜好がはぐくまれ、やがて東洋の神話伝説を調査し記事に書くようになっていく。

先行研究において、銭本氏の論文では、クレビールとの交友はハーンの民俗音楽そして舞踏の知識を急速に拡大した[3] と主張し、西成彦氏は著作において、クレビールのおかげで民間風俗の中の音楽性にスポットライトを当てる洗練された方法をハーンが身につけた[4] と断言した。このように、ハーンとクレビールの友情はよく知られていて、二人の音楽に関する交流は、時々取り上げられる。だが、二人の中国音楽にかかわる交流は重要であり、極めて濃密であるが、今までの先行研究において言及されたことなく、注目されていない。本論文は、そこに着目した。

本論文では、ハーンがアメリカの新聞紙で発表した、中国の音楽にかかわる二つの記事「音楽クラブにおけるロマンチックな出来こと」[5] と「音楽におけるロマン主義」[6] を取り上げ、分析した。さらに、クレビール宛てのハーンの手紙から、二人の中国音楽にかかわる交流と活動について考察した。本論文では、ハーンが中国に関心を持つきっかけを説明し、さらに、クレビールがハーンに与えた影響と、ハーンの中国音楽に対する理解を明らかにする。また、論説及び手紙において、翻訳により曖昧になる表現（カタカナ）について、明らかにし、訂正してみる。これらを通して、ハーンの中国音楽への接近が、その後のアジアへの関心や日本への関心にいかにつながっていったのかを考察する。

二　音楽評論家クレビール

ハーンとクレビールが知り合ったのは、1874年、二人ともシンシナティに移転しジャーナリストの仕事を始めた頃である。ハーンは「インクワイラー」紙に所属し、クレビールは「ガゼット」[7] 紙に所属している。当時の二人は、同じ地域の新聞報道を担当し、共通の話題が多く、特に東洋の音楽ついて意気投合していた。1877年末、ハーンがシンシナティから離れてニューオーリンズに行ってからも、クレビ

1）ウェルズ恵子（2009）「幻のブラック・クレオールソング・プロジェクト―ハーン、クレビール、ケイブル」,『文学』（特集ラフカディオ・ハーン再読）p76-77, 岩波書店。

2）Elizabeth Bisland, *The Life and Letters of Lafcadio Hearn, Volume 1*, 1906. 本論文で引用したハーン書簡は第一書房の『小泉八雲全集』によるものである。

3）銭本健二（1987）「ラフカディオ・ハーンと神聖舞踏」『山陰地域研究　3』p114.

4）西成彦（1993）『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店. p145.

5）原題：*A Romantic Episode at the Music Club*（*Cincinnati Commercial*, October 1, 1877）。本論文で引用したハーンの記事は恒文社の『ラフカディオ・ハーン著作集』によるものである。

6）原題：*Romanticism in Music*（*Item*, July 20, 1878）。

7）Cincinnati gazette, 1855年創立1883年廃刊。

ールと頻繁に手紙で通信し、お互いの近況や新聞論説の最新成果を報告し合い、東洋及び音楽について様々な議論を交わし続けた。クレビールは、東洋と西洋音楽における音階の違いなど、論理的に音楽を研究している。それに対して、ハーンははじめに単純に東洋楽器から出した不思議な音に魅了され、ゆくゆく、東洋の古の旋律の中に含まれた精神・歴史・宗教思想に関心を持ちはじめた。ギリシャや中国のような歴史の長い国の音楽の起源については、二人とも強い興味を持っている。

クレビールに関する先行研究は、日本においても海外においても少ない。その少ない論考は、以下に引用した資料のように、*The New York Tribune* 紙に入ってからの音楽評論及び黒人音楽に関する研究に焦点化されている[8)]。

> Henry Edward Krehbiel（1854-1923）は、シンシナッティで音楽レポーターをしたのち1880年からニューヨークに移り、81年に創刊された日刊紙 The New York Tribune で、84年から1924年まで音楽批評家として健筆をふるった。19世紀後半から20世紀初頭にかけてアメリカを代表する音楽評論家である。1878年から、旧知の Lafcadio Hearn を介してニューオーリンズ在住の作家 George Washing と知り合い、ブラック・クレオール·ソングの研究に興味をもったと思われる。クレビール自身が南部へ歌の収集に出かけた形跡はないが、ハーンやケイブルを始めとする人々から協力を得つつ、音楽標本や収集者の発言を細かに集めた。彼の主張において特に斬新であったのは、アフリカの伝統をくんだアメリカ独自の音楽であり、黒人がアメリカ文化の生成に寄与していると明らかにした点である。

以上の引用文に示されているように、先行研究においてクレビールの1881年後の成果が注目され、それ以前の生涯と作品は謎である。1874-1880年シンシナティにいる時代に書いた中国音楽に関する論説などは、当時所属していた『ガゼット』紙に発表しているが、『ガゼット』紙が破産したため、現在では調べにくい状況となっている。その上、ハーン書簡集では、ハーンが書いた手紙がほとんどで、クレビールが書いたものが収録されていない。シンシナティ時代のクレビールのことは、ハーンの手紙や論説から推測するしかない。

このような状況下で、1850-1920年アメリカにおける中国風音楽の発展史を述べた一冊の著作 “Yellowface: Creating The Chinese In American Popular Music And Performance, 1850s-1920s”[9)] では、少しだけクレビールの中国音楽研究が記されている。この著作によると、19世紀から、シノロジー（中国学）の盛行に伴い、アメリカの音楽家たちは、少しずつ中国音楽の元素をアメリカの音楽に取りいれた。こうした時代背景の中で、クレビール1880年代の中国民謡に対するアレンジは有名である。とくに、中国の民謡「茉莉花」などの歌詞を英語に訳し、旋律を西洋の楽器が演奏しやすくようにアレンジしていることが、評価されている。また、中華街に住む中国人音楽家との共同作業、さらに自ら中国の

8）ウェルズ恵子（2012）『アメリカ黒人霊歌：19世紀・20世紀初頭文献復刻集成』ユーリカ・プレス，別冊 p10.

9）Krystyn R. Moon, *Yellowface: Creating the Chinese in American Popular Music and Performance, 1850s-1920s.* Rutgers University Press, 2004. p92.

楽器が演奏できることが同時代の他の音楽家との違いであるとわかる。

このような評価が得られたのは、クレビールがハーンと頻繁に一緒に東洋の音楽を語りあったためであると考えられる。では、ハーンとクレビールは、何をきっかけに、どのように中国の音楽について論じたのか。次章からはくわしく論述していきたい。

三　中国音楽への関心

1887年、ハーンの『中国怪談集』がアメリカで出版された。この著作の扉ページに、親友クレビールへの献辞が載せている[10)]。

この書をわが友になる音楽家――
金色の膚もつ天子の子、漂泊の清人に音曲を談じて感動させ、
蛇を胴に張った不思議な音をだす三絃をひかせ、
わがために震え泣く月琴を弾じて
ふるさとの素馨の花の歌[11)] をうたわせてくれた――
ヘンリー・エドワード・クレービールに献ずる

さらに、1887年ごろのクレビール宛ての手紙に、ハーンはこの『中国怪談集』について、「これは君に捧げた本である」と書いた[12)]。なぜ、ハーンはこの段階で中国の怪談をテーマに著作を書いたのか、なぜクレビールに捧げたのか。実は、この献辞にこそ、ハーンが中国に興味を持つきっかけとなった由来が隠されている。

献辞に書かれたことは、『中国怪談集』出版の十年前、1877年に起こったことである。この出来事を、ハーンは「音楽クラブにおけるロマンチックな出来こと」という記事に詳しく述べた。この記事の内容は以下の如くである[13)]。

ある午後、ハーンとクレビール二人が、中国人チャー・リーと出会った。リーはシンシナティにある洗濯屋の主人であり、中国から持ってきた古典楽器を多数所持している。当時のクレビールはすでに、東洋音楽に関して一連の研究論文を構想中で、その場でリーの蛇皮線を借り、中国伝統民謡の「茉莉花」を引き、リーの信頼を得たという。そしてリーは、ハーンとクレビール二人に約束し、音楽クラブで、中国の楽器で小さな演奏会をやる。三人の中国人がそれぞれ月琴・二胡・蛇皮線で演奏し、そのハーモニーはハーンらに強く感動を与えた。

ハーンはクレビールと一緒に、初めて中国人による中国楽器の演奏を聴き、感銘を受けた。中国人の

10）平井呈一訳（1995）『中国怪談集他』恒文社 p241.
11）原文は“The song of the Jasmine Flower”，ジャスミンの花の歌，中国の民謡「茉莉花」のことである。
12）ELIZABETH BISLAND, *THE LIFE AND LETTERS OF LAFCADIO HEARN*（*VOLUME 1*）, 1906. p367.
13）平川祐弘他訳（1989）『ラフカディオ・ハーン著作集 第一巻』恒文社。p199-205.

チャー・リーも友人となり、のちにクレビールの中国音楽研究に協力することとなった。この出来事をきっかけに、ハーンはニューオーリンズに移転した後も、手紙を通じて常にクレビールと中国音楽を熱く語り合う。ハーン没後の1906年に、クレビールは「詩人から音楽家の手紙」一文を発表し、文章の冒頭にこの出来事をあげてハーンとの友情を記念した[14]。「音楽クラブにおけるロマンチックな出来こと」は、『中国怪談集』出版のきっかけでありながら、ハーンの中国音楽への関心の始まりでもあった。

次に、時間順にハーンが中国音楽を語る二通の手紙を見ていく。「音楽クラブにおけるロマンチックな出来こと」のあと、ハーンはシンシナティを離れてニューオーリンズに移転し、クレビールと手紙を交わし始めた。

① **手紙その一**[15]

1877年ニューオーリンズにて

私の親愛なクレーピル

貴方のお手紙――貴方の論文とあの甘味のある、戯れめいたプログラムがすっかり私の氣に入りなした。あの『支那の幻想』は私には、斯うした種類の嬉しい小さな會が度々あった歐洲の或る有名な藝術倶樂部と言った實際さうした氣味のあるものでした。

貴方の斯うした小さな仕事は皆眞實の藝術味、輝かしい藝術味があるのです、言葉には述べられない程それが私には愉快なのです。私は全體に就いて話してゐるのです、ようございますか。何か私が音樂上の意見を申すのでしたら、まるつきり知りもせぬことを饒舌つてゐるとお考へになっても御無理はないかも知れなせぬ。然しあの日、倶樂部で聽いたあの美しい支那曲調を決して忘れてゐないで、時とすると我れ知らずそれを口笛に吹いてゐることがあるのを御存知ですか。

貴方がチャー・リーの樂器を手に入れられ、さうして他の樂器もやがて受け取ることになってゐるのを知り、全く嬉しく存じます。

まだあの支那劇その他を落手してゐませぬ、が、落手しましたらお手紙を上げ、さらして出來るだけ早くお戻しすることにします。

② **手紙その二**[16]

1877年ニューオーリンズにて

『オ・メ・トー・プーヅル！』――支那薔薇の柔らかな薫りと黄色い美しさがある貴方の外國種の喜劇に私はひどく魅せられて了つたのです。慥にあの雑色の假綴本の東洋の香に私は恍惚したのです、だって私の頭は「泥のやうな黄色ではない」のですもの。然し此の次のお手紙て――『英語の原文から改作せる』――なんて表題の神祕な文句に就いてはどうぞ私の疑を解いて下さい、何故と

14）*LETTERS Of A POET To A MUSICIAN. Lafcadio Hearn to Henry E. Krehbiel. The CRITIC* And Literary World. April 1906, p309.

15）大谷正信他訳（1927）『小泉八雲全集 第九巻』第一書房。p17-18.

16）大谷正信他訳（1927）『小泉八雲全集第九巻』第一書房。p21.

言へば、それを理解しようとする無駄骨折りに辛抱の鐵靴をすりへらしてゐるのですから。その戯曲を讀みながら、私しみじみと欲ひましたのは、あの合の奏樂――野蠻風な美しい節廻はし――とそれに蛇味線のかごとがまし悲しい音色を聽くことが出來たらと言ふことでした。あの草稿は直きに手元に返し申し上げます。

この二通の手紙とも、「中国劇」と「プログラム」と「原稿を返す」ことに言及している。クレビールはチャー・リーの楽器を買収し、ハーンに、ある中国にかかわる演劇の「プログラム」を送り、「プログラム」の作成をハーンに協力させた、と推測できる。この「プログラム」について、ハーンは数年後、記事「音楽関係の文献」の中でこのように記している[17)]。

教養のある人間であれば、絵画や彫刻の台座に付された題名を見ただけで作品の内容を把握することもしばしばである。しかし、音楽の傑作の価値を知るためには、こんなことでは足りない。こういうわけで便箋大のフログラムの代わりにパンフレットを配るとか、台本を各国語で印刷して各幕ごと、各さわりごとに細かな説明を加えるということになるのである。合衆国では、音楽と音楽に対する趣味が発達するにつれて、こうした解説方法はここ十年の間に文学的にも重要なものとなってきている。フランス及びドイツの音楽の中心地においてこの種の解説方法が持っている文学的重要性と肩を並べるほどである。

以上によると、クレビールが作った「プログラム」は、単な音楽劇のプログラムではなく、劇の内容・背景・意図の解説も加えているため、ハーンはそれを「甘味のある、戯れめいたプログラム」と評したのである。

次の、ハーンが1878年７月20日「アイテム」紙に発表した「音楽におけるロマン主義」[18)] という記事を見ると、状況が明らかになる。

クレビールは中国音楽の歴史と発展に関する評論活動の一環として、中国音楽のコンサートを催し、シンシナティ市の音楽愛好家たちをびっくりさせた。とくにそのコンサートでは、演奏家たちが中国人であったことや、楽器も異様な格好をした中国製であったことが話題になった。ついでクレビール氏は、同じような関心を持つ観客のために、幻想的な象形文字で書かれた中国の原作から翻訳した芝居を上演し、一風変わったモンゴルの音曲や民謡から選んだ素晴らしい曲を紹介して、観客を喜ばせた。

ここで、クレビールが一年かけて計画していた「中国劇」は成功に終わった。しかし、この劇については、記事には題名が書かれていないため、特定するのは難しい。1878年、シンシナティ市の音楽ホー

17）森亮他訳（1991）『ラフカディオ・ハーン著作集第三巻』恒文社。p297.

18）森亮他訳（1988）『ラフカディオ・ハーン著作集第二巻』恒文社。

ルの建成にかかわる劇だと推測する。

ハーンはこの記事の最後で、以下のように述べた。

> 音楽の歴史ほど伝説や物語や詩的な伝承が豊富な歴史研究の分野はなく、現代の作家たちが音楽の作品に存在する神話と不思議な物語を誰も編纂しようとしないのは、少しばかりおかしい。

これは、ハーンの中国に抱く興味が音楽の領域から神話伝説に転向した、と捉えられる。

その後、ハーンはますます中国に興味を抱き、中国に関する蔵書を集め続けた。中国歴史伝説に関する研究の成果の一つと言える「中国の神話と崇拝」という記事は、1885年２月17日、『タイムズ・デモクラット』紙で掲載された。これは、ハーンの新聞記事において珍しく一万字を超える長編記事で、「TIEN-DZE（天子）」「FESTIVAL OF LANTERNS（元宵節）」「NIU-VA（女媧）」などをトピックにし、総計18項目を挙げ、三皇五帝から先祖祠堂まで、多彩多様な中国の伝統神話と崇拝を紹介したものである[19]。

そして1887年、『中国怪談集』が出版された。こうして中国怪談集の扉ページに、クレビールに先にあげた献辞を捧げたのであった。

四　中国音楽にかかわる事項の解明

ハーンの論説や手紙には、まるで暗号のような神話伝説にかかわる異国の言葉が常に多く混ざっている。日本語に翻訳される場合、意味が分かりにくい言葉がそのままカタカナで訳されているのである。そのようなカタカナ語の漢字の書き方やその意味を解明することにより、ハーンの中国文化に対する理解の度合を考えていきたい。まずは、一つの手紙をあげてみる[20]。

> 1877年ニューオーリンズにて
>
> 『オ・メ・トー・プーヅル！』――支那薔薇の柔らかな薫りと黄色い美しさがある貴方の外國種の喜劇に私はひどく魅せられて了つたのです。
>
> （中略）
>
> 時にあなたは眞物のあの支那の銅鑼を聽きになったことがありますか？私の言ふのは、音を出す怖ろしい力を有つてゐるあの黄色い金屬の大きな月形の圓盤の一つのことです。南太平洋や支那の骨董物の博物館を自分で所有つてゐる紳士が私に一つ見せてくれたのでした。（中略）その銅鑼は南の國の沼の上に昇る月のやうに青白く大さく黄色に光ってゐました。私の友達は布を捲いた撥でその銅鑼の面を輕く叩きました、すると淺い岸に寄せる波のやうに、啜り泣きを始めました。友はも

19）鄭芝婥（2019）「小泉八雲『中国の神話と崇拝』研究：1885年マルディ・グラに見える東洋の神話」東アジア文化交渉研究第12号，p302.

20）同注16。前掲「手紙その二」の続き。

う一度それを叩きました、すると大きな松林の風のやうに唸りをあげました。また叩くと哮え始めましたが、叩くたんびにその咆え聲はだんだん太くなって、トール神の戰車の轍のきしめく響かとあやしまれました。何か斯う怖ろしい神祕なもののやうな感じに打たれました。あんな薄い、薄い振るへる金屬の圓盤がどうしてそんな畏ろしい震動を生じることが出來るのかと考へて見ましたが、わからずじまひでした。

手紙の冒頭部分では、『オ・メ・トー・プーヅル！』という謎の言葉が並んでいる。原文は「O-ME-TAW-BOODH」である。この発音から、この言葉は「阿弥陀仏」の意味であると推測できる。驚嘆を表す時に「阿弥陀仏」と叫ぶ出す中国人の口癖を、ハーンはよく知っている。そしてクレビールも中国のことを知っているので、この暗号のような言葉『オ・メ・トー・プーヅル！』を手紙に書いても意味が通じるのである。

手紙の後半部分に、ハーン自ら、中国の楽器を探しに行ったことをクレビールに報告した。銅鑼というのは中国民間演劇における必要不可欠な楽器の一つで、欧米人から見る神秘な東洋風情が漂う代表的なオブジェクトである。ジャーナリストとして、当時流行っている物事を記事に取り入れることは必定であるが、中国音楽に関する発見を第一にクレビールに報告している。つまり、クレビールこそ自分の・中国音楽の真の理解者であるためだと考えられる。

もう一つ興味深い例がある。ハーンの記事「音楽クラブにおけるロマンチックな出来こと」において、ハーンがクレビールの中国音楽に関する講義の内容を引用し、中国音楽の起源伝説を語る一節である。以下に引用する。

約五千年前の昔に遡る。ホアン・ティは皇帝チェ・ユーに反乱を起こし、これを討ち、弑して、自ら帝位に就いた。ホアン・ティは叡知の言をなす人々、賢人と哲人を愛し、民草の師として彼らを遇し、国内で高い地位を彼らに与えた。彼はまた、音楽――鐘鼓の響きを愛した。管をよくする人々、絃の名手たちを重く用いた。

そして彼は賢人リン・ルンに命じて、国中をくまなく巡察せしめ、人々に楽律を教授せしめ、もって音楽の清らかさを保全せしめた。

こうしてリン・ルンは国の果てまで旅をした――シ・ユンの地まで赴き、永遠に流れて止まぬ黄河の水の音を聞いた。

小刀で河岸に生えている一本の竹を伐り取って、それに息を吹き込んで音を作ってみたりした。音は低く沈んだ声の響きに似て、悲しかった――それは黄河の声であった。

それからまた彼は珍しい鳥の歌も聞いた――吉兆の鳥、鳳凰の歌も聞いた。

雄の鳳の歌は六つの音を響かせた。 雌の凰の返す歌は、また別の六つの音を響かせた。

じっと耳を傾けていた彼は、その十二音の一つが、自分の声の響きであり、黄河の川の音であることに思い到った。そこで彼は、川の音と同じ、瑞鳥、鳳のいちばん低い音を、宮と名づけ、それぞれ長さの異なる十二本の竹を伐って、鳳凰の発する全十二音を自分の息で出してみた。

第一音、宮をそれら十二音の基礎に据え、雄鳥の完全音と雌鳥の不完全音に似せて、彼は自ら正

しい楽律を作り上げた。

ハーンが「音楽クラブにおけるロマンチックな出来こと」で言及したこの伝説は、実際確かに中国の十二律に関する伝説であり、《呂氏春秋》に以下のように記載されている。

昔黄帝令伶倫作五律、聴凤凰之鳴、以別十二律[21)]。

『ハーン著作集』において、この伝説の中に出てくる呼称をカタカナで表記している。ここで、漢字表記を補充しておきたい。「ホアン・ティ」とは「黄帝」、「チェ・ユー」とは「蚩尤」、「リン・ルン」とは「伶倫」、「シ・ユンの地」とは、古代中国が黄河の起源地だと思われる「崑崙山」のことである。

そしてこの伝説について、ハーンは記事の中で次のように述べた。

シナ音階の不完全性――すなわち、そこに第四音と第七音の欠けている事実は、鳳凰がそれらの音を出せなかったというよりは、出そうとしなかった事情によって、説明できるようである。

「第四音と第七音の欠落」というのは、クレビール従来の主張であると、ハーンはこの記事の前文で述べた。シナ音階というのは、中国の五声――宮、商、角、徴、羽の五つの音階のことである。西洋では７つの音階があるので、「シ」と「ファ」の音階がない中国の五声は「不完全」だと思われのだが、ここでクレビールは、実際中国に十二律まであることを指摘し、不完全ではないと考えている。

この論説において、ハーンは初めて中国の文化と直接に接触し、感動を受けたものの、どのように形容すればよいのか分からなかった。そこでクレビールの主張をひたすら引用しているのである。そうして、この出来事のあと、クレビール宛ての手紙の中で、中国音楽について夢中に語る様子から見ると、この出来事をきっかけに、ハーンの中国音楽に関する趣味が、ますます増えていくのであった。

五　おわりに

1877年から1887年の十年間は、ハーンとクレビールが最も親密な十年間である。「音楽クラブにおけるロマンチックな出来こと」と「音楽におけるロマン主義」だけでなく、ハーンが書いた音楽関係の記事は、ほぼすべてクレビールについての言及がある。1879年の記事「音楽についてギリシャ人が知っていたこと」では、クレビールは「古代世界の音楽史のさまざまな時代に関して一連の非常に優れた評論を発表している」と評し、クレビールの論文について論じた[22)]。1886年の記事「音楽関係の文献」では、「クレビール氏が才能に恵まれていることは確かであるから、おそらく合衆国の音楽の発展に関する歴史家

21）《呂氏春秋・古賢篇》、紀元前239年。

22）森亮他訳（1987）『ラフカディオ・ハーン著作集第四巻』恒文社。p425.

として、また批評家として権威の地位を保ち続けるであろう」と称賛した[23)]。二人の友情、音楽に関する交流は真摯で、深かった。

この十年間はまた、ハーンが最も中国文化のことに関心を持ち、熱心に研究した時期である。クレビールそして中国人の友人チャー・リーに影響され、最初は中国の音楽に感銘を受けた。その後、さらにハーン自身の東洋嗜好がはぐくまれ、やがて東洋の神話伝説を調査し記事に書くようになっていくのである。1880年代のハーンの新聞記事を読むと、中国に限らず、ハーンの研究領域は東洋全体の文化に至っている。音楽－民謡－詩歌－伝説－宗教などの広い範囲に、ハーンは自ら東洋への理解を深化していく。そして東洋への憧れは、やがて日本への憧れになり、ハーンは1890年、日本の土地に踏み込んだ。しかしながら、日本滞在中に、中国のことは終始視界に入っており、日本を解明するための比較対象となっているのである。

23）同注17。